帝京科学大学紀要 Vol.8（2012）pp.47-56

就学前児のテレビ視聴と母親の育児態度

旦　直子

帝京科学大学こども学部児童教育学科

TV viewing of preschoolers and their mothers' attitudes toward childcare

Naoko DAN

Many previous researches have examined relations between children's TV viewing and many other aspects of their daily lives and developments. And they often discussed on negative impacts of TV viewing on their development. This research aimed to re-examine some of these relations by measuring TV viewing, regularity of daily life and developments of preschoolers and their mothers' attitudes toward childcare and television. Results of a questionnaire survey showed that the amount of TV viewing related with the regularity of daily life negatively. And detailed analysis of their causal relations suggested that high regularity of daily life shorten amount of TV viewing, but not vice versa. This suggested that TV viewing is not a factor that affect on children's everyday life and development, but an indicator that reflects features of children's everyday life.

Key words：preschoolers / TV viewing / mothers' attitudes toward childcare / questionnaire / development

1．はじめに

現代社会では、子どもの環境においてテレビの存在は無視できないほど大きな位置を占めるようになってきている。首都圏の子どもたちを対象にし、平成13年にスタートして現在も継続されている大規模調査であるNHK放送文化研究所の“子どもに良い放送”プロジェクトの調査[1) 2)]によると、就学前児のテレビの視聴時間（この調査では「専念視聴」と「ながら視聴」をあわせた時間を視聴時間としている）は、年齢によっても異なるが平均で1日に1時間半ほどであるという。また、視聴時間に加え、視聴してはいないがテレビがついているだけの時間（接触時間）も含めると、0歳で3時間13分、1歳で3時間24分、2歳で2時間44分、3歳で2時間29分、4歳で2時間13分、5歳で2時間9分であった。24時間から睡眠や入浴などの必需行動時間と移動などの拘束時間を引いたいわゆる家庭での自由な“可処分時間”は、0～3歳までは約6時間、4～6歳では約5時間から4時間である（NHK放送文化研究所，2003, 菅原ら（2005）[3)]より引用）ことを考えると、子どもたちのテレビ視聴時間・接触時間は決して少ない数字とはいえないだろう。

このように、乳幼児にとってテレビやビデオ・DVDといった映像メディアが当たり前の存在となるに伴って、子ども時代にテレビを視聴することが発達に何らかの影響を及ぼすのではないかという懸念も生じてきている。特に、アメリカ小児科学会や日本小児科医会、日本小児科学会が、乳幼児のテレビ接触・視聴に関して、2歳以下の子どもにテレビを見せることを控えることを盛り込んだ提言を出してからは（アメリカ小児科学会は1999年、日本小児科医会、日本小児科学会は2004年に提言を発表）、一般の養育者の関心もより高まってきたといえよう。

では、実際にテレビ視聴は子どもの発達にどのような影響を与えるのであろうか。Zimmerman, Christakis and Meltzoff（2007）は、乳幼児期のDVDやテレビの視聴が語彙発達に影響するかどうかを検討した[4)]。彼らは、2～28ヶ月児を対象に、親とのインタラクションの時間、DVDやビデオの視聴時間･種類や､言語発達の尺度であるコミュニケーション発達尺度（CDIの得点）を調べた。その結果、赤ちゃん向けのDVDやビデオの視聴は早期幼児期の語彙発達にネガティブな影響を与えること、親が一緒にテレビを視聴しているかどうかは言語発達に影響を与えないことを報告している。また、Christakis et al.（2004）は、乳幼児期（この研究では1歳時と3歳時）のテレビ視聴量が多いほど7歳時点でADHDなどに関連する注意の問題が生じる割合が多いことを示した[5)]。さらに、Zimmermann and Christakis（2005）は、3歳未満でのテレビ視聴時間が多い子どもほど就学時の言葉の読みや理解、数字の記憶などの成績が劣るという報告をしている[6)]。

日本においても、長時間のテレビ視聴が子どもの発達にネガティブな影響を及ぼすという報告が多くなされている。たとえば、服部ら（2004）は、3～5歳児を対象として質問紙調査をおこない、テレビ視聴時間が長くなると生活習慣に悪影響を及ぼす可能性を指摘した。つまり、テレビ視聴時間が長いと、就寝時間が遅くなり、就寝・起床のリズムが不規則となることや、朝食摂取が十分でなく、偏食傾向が見られたり、清潔や着脱衣の習慣も形成されにくいことを見出している[7]。また、齋藤（2008）は、1歳6ヶ月児を対象として、精神発達指標、生活、テレビ・ビデオ視聴時間の関係を調べた。その結果、精神発達指標とテレビ視聴時間に負の相関があること、外遊び時間と平日にテレビがついている・見ている時間の長さに負の相関があること、食事中にテレビを消している世帯はテレビをつけたり見ている時間が短いことを報告し、テレビを見ている時間が長くなることに伴って精神発達や外遊びにも影響が出てくることを示唆している[8]。

一方で、子どものテレビ視聴時間を規定する要因となっているのは何であろうか。先にあげた“子どもに良い放送”プロジェクトの中間総括報告[1]では、親のテレビ視聴時間、親のテレビ影響観（テレビに対してよい影響の方が多いと思っているのか、悪い影響の方が多いと思っているのか）、親の選択フィルタリング行動が子どものテレビ視聴時間と関わっていることを示している。つまり、親（特に母親）のテレビ視聴時間が長いと子どものテレビ接触時間も長くなること、親がテレビに対してよい影響が多いと思っているほど子どものテレビ接触時間が長くなること、親の選択フィルタリング（たとえば番組内容を選択したり、食事中にテレビをつけないようにするなど）が多いと子どものテレビ接触時間が少なくなることを見出している。この調査の他にも、親のテレビに対する視聴制限と親の視聴状況が子どもの視聴時間を左右することを指摘した研究が報告されている。加納ら（2009）は、1歳6ヶ月児と3歳児を対象にして、幼児期のテレビ・ビデオ視聴と養育環境の関連を検討した。その結果、養育者が視聴時間量や時間帯を決めたり食事中の視聴制限をすることや、視聴以外の活動をするほど視聴時間が短くなること、養育者が長時間視聴であると子どもも長時間視聴になることを報告している[9]。また、服部・足立（2006）は、3～5歳児の就寝時刻と両親の帰宅時刻並びに降園後のテレビ・ビデオ視聴時間との関連性を調べている。彼らは、夕食中の視聴時間および夕食後から就寝までの視聴との間に正の相関があることを報告し[10]、夕食中・後のテレビ視聴時間を調節することで就寝時刻を早められる可能性を指摘した。さらに、ゲーム以外の活動が多いと視聴時間が短くなるという知見も見出されている。幼児のテレビ・ビデオ視聴時間、ゲーム時間と生活実態との関連を調べた栗谷・吉田（2008）は、絵本の読み語りや親子で遊ぶなどの親の直接的な関わりが視聴時間・ゲーム時間に関連があることを報告している[11]。

以上のように、何が子どものテレビ視聴時間に影響を及ぼすのか、また視聴時間が子どもの発達の何に影響を及ぼすのかについては様々な研究がなされてきた。しかし、こうした研究はその多くが相関関係を示すデータを元に議論されているため、因果関係についてははっきりしていない。“子どもに良い放送”プロジェクトのように、因果関係の推定を目指してパネル・パラダイムを用いておこなわれている研究もあるが、その数は非常に少ないのが現状である。テレビ視聴が本当に子どもの発達において重大な影響を与えるのであれば、その因果関係を解明することは不可欠であろう。

そこで本研究では、質問紙法を用いて、子どものテレビ視聴に関わる様々な変数間の因果の方向性を検討することを目的とした。そのためにまず、先行研究で因果性が示唆されている、子どものテレビ視聴に関わる様々な変数の関連を全体的に把握することを試みた。子どものテレビ視聴時間に影響する要因としては、母親のテレビ視聴時間、母親のテレビに対する態度（テレビを肯定するかどうかやテレビ視聴時間をコントロールするか）、母親のテレビに対する以外の養育態度（テレビ以外の活動への積極性や教育に対する態度）を取り上げる。テレビの視聴時間が子どもの発達に及ぼす影響については、自律度（生活習慣ができているか）と子どもの発達（言葉に遅れがないかや、発達に不安がないかなど）を取り上げて検討する。その上で、テレビ視聴時間と他の子どもの生活変数の間の因果関係について示唆を得るため、共分散構造分析を用いて、因果の方向性の吟味を試みた。

2. 方法

2-1. 調査手続きと調査参加者

調査時期は、2011年3月から5月にかけておこなわれた。東京都A区内の3つの園（保育園、幼稚園、幼保園）の職員を介して質問紙の配布・回収を行い、園に通う就学前児（1～6歳）を持つ母親

144 名からの協力を得た。そのうち、欠損値を含むデータを除いた 139 名のデータを分析対象とした。

2-2. 説明モデルの構築と質問紙の構成

概念モデル

先行研究でテレビ視聴に影響を与える要因として示されている、母親の育児一般への態度(「教育意欲」「TV 外活動」) とテレビへの態度 (「親の視聴時間」「親の TV 肯定度」「親の TV 統制度」)、を想定した。一方で、テレビ視聴からの影響が議論されている子どもの生活変数として、「自律度」「発達評価」をおいた。さらに、総合的な子育ての質の指標として「親の子育て満足度」を考えた。

これらから、母親の育児・テレビ態度→子どもの生活変数→子育て満足度という影響の流れと、子どもの生活変数の中でのテレビ視聴時間と他の生活特性との間の相互の影響関係を描いた仮説モデルを構築した (**図 1**)。

質問紙の構成

以上にあげた 9 つの変数を調べるために、母親の評定を用いた質問紙を構成した。変数のうち、親のテレビ視聴時間、子どものテレビ視聴時間についてはフェイスシートで尋ねた (それぞれ「平日、あなたがテレビ・ビデオ・DVD を見ている時間は 1 日にどれくらいですか？」、「平日、お子さんがテレビ・ビデオ・DVD を見ている時間は 1 日にどれくらいですか？」という質問であった)。なお、本調査におけるテレビとは、テレビの他、ビデオ・DVD の映像メディアを含めて考える。

それ以外の変数については、複数の質問項目から構成されていた (**表 1**)。各項目の表現がどれくらい当てはまるかについて、それぞれ「1. まったく当てはまらない」から「5. とても当てはまる」の 5 段階で回答してもらった。質問項目についてはランダムな順番で配列した。1 つ 1 つの変数に対応する質問項目の数が 2 ～ 6 と少なかったが、これは実施上の制約の中で、テレビを取り巻く諸変数を全体的に把握したいという研究目的との両立をはかった結果である。

これらの質問項目の他、質問紙では、子どもの年齢、性別、同居家族、兄弟数、平日一日あたり親子で一緒に過ごす時間、平日子どもが一日にテレビや DVD のついている部屋で過ごす時間 (テレビ接触時間)、子どもがよく見るテレビ番組名、子育て支援者の有無を尋ねた。

得点化

テレビの視聴時間およびテレビの接触時間については、1 日あたりの視聴時間を〇時間〇分という形式で記入してもらい、その値を用いた。他の 7 つの変数についてはリッカート尺度とみなして 0 ～ 4 点で得点化し、逆転項目については 4 ～ 0 点で変換した後、変数ごとに項目間の平均値をとってその変数の得点とした。

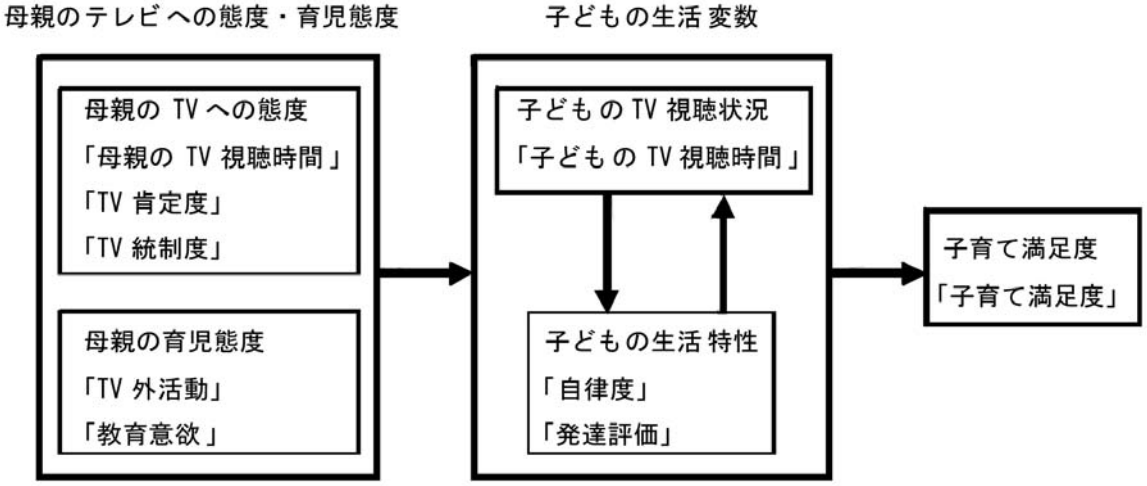

図 1. 本研究での概念モデル

表 1.　本研究で使用した質問項目

変数名	質問項目
TV肯定度	教育にテレビやビデオ教材を活用したいと思う
	子育てにテレビは必要であると思う
	内容がよい番組は子どもに見せたいと思う
	私はテレビを見るのが好きではない*
	子どもにはどんな内容であってもテレビやビデオを見せたくない*
TV統制度	テレビ・ビデオ・DVDを見る時は子どもと一緒に見る
	子どもがどのようなテレビ番組を見ているかを知っている
	テレビはたいていつけっぱなしにしている*
	子どもの一日のテレビ視聴時間を決めている
	食事中はテレビを消している
	子どもが見るテレビ番組の内容を特に制限する必要はないと思う*
TV外活動	子どもとよく外遊びをする
	子どもに絵本を積極的に読み聞かせている
	子どもは運動が好きである
	親子で遊ぶ時間は十分にある
教育意欲	早期教育に関心がある
	小さい時から学習習慣をつけさせたいと思う
自律度	子どもは自分のことは自分でやろうとする
	子どもはお手伝いをよくする
	子どもは規則正しい生活をしている
発達評価	子どもの発達が遅れているのではないかと不安である*
	子どもは友達と仲良く遊ぶことができる
	子どもは攻撃的になることがある*
	子どものことばの発達は順調である
子育て満足度	毎日忙しくて時間が足りないと思う*
	子育ては楽しい
	子育てに不安はない
	子どものことを理解している

*は逆転項目であった。

3. 結果

3-1. 変数αの信頼性

各変数に対応する項目数は少なかったが、α係数は「子育て満足度」を除いて0.51～0.71という中程度の値であった（**表2**）。「子育て満足度」ではα=0.36（項目数4）であったが、これは満足度が子育ての様々な側面での満足度を尋ねる多面的な指標だったからだと思われる。以上から、一定の信頼性があると考えられる。

表2. 各変数に対する質問項目数とα係数

変数	*n*	α
TV肯定度	5	0.58
TV統制度	6	0.53
TV外活動	4	0.51
教育意欲	2	0.71
自律度	3	0.71
発達評価	4	0.62
子育て満足度	4	0.36

3-2. 基本的属性

表3に、子どもの年齢、性別、きょうだい、通園先、両親の勤務形態ごとの人数を示す。

対象児は5歳を中心として1～6歳にわたっていた。本研究では、保育園、幼保園、幼稚園の3つの園から協力を得て行われたが、各園の受け入れ対象年齢や定員数の差が、各年齢の人数にばらつきが出たことにつながったと考えられる（**表4**）。また、幼保園において6歳児がゼロであるのは、実施時期が5月であり、年長児クラスにおいて6歳の誕生日を迎えていない子どもがほとんどであったことが原因であろう（保育園と幼稚園は3月に実施した）。本来、実施時期についてはすべての園について3月に実施する予定であったが、2011年3月に起こった東日本大震災の影響により、実施時期にばらつきが生じた。

きょうだい数は、2人きょうだいが最も多く（47%）、次いで1人っ子（27%）、3人きょうだい（21%）の順に多かった。平均は1.04 ± 0.82人（±は標準偏差）であった。

両親の勤務形態については、ほとんどの家庭で父親はフルタイム勤務であった。母親については、専業主婦が全体の34%、パートタイムが35%、フルタイムが27%であり、パートタイムを含めて仕事を持つ母親が62%と半数を超えていた。これは、今回協力をしてくださった園（**表5**）の特性に由来すると考えられる。一般的に、保育園はほとんどすべての家庭が両親ともに仕事を持っており、幼稚園では専業主婦家庭が多い。今回協力を得た幼保園においては、制度上は1歳児から3歳児までは保育園、4歳児・5歳児は幼稚園としての認可を受けている園であったため、3歳児まではほとんど共働き家庭であった。

表3. こどもの基本的属性

			人数
年齢		1歳	5
		2歳	10
		3歳	18
		4歳	28
		5歳	50
		6歳	28
性別		男児	61
		女児	78
きょうだい		1人っ子	37
		2人きょうだい	66
		3人きょうだい	29
		4人きょうだい	7
通園先		保育園	39
		幼保園	68
		幼稚園	32
両親の勤務形態	母親	専業主婦	47
		パートタイム	48
		フルタイム	38
		未記入	6
	父親	フルタイム	121
		パートタイム	2
		専業主夫	1
		ひとり親家庭・未記入	15

表4. 児の年齢と所属のクロス表

	所属			合計
	保育園	幼保園	幼稚園	
1歳児	0	5	0	5
2歳児	6	4	0	10
3歳児	8	10	0	18
4歳児	4	24	0	28
5歳児	10	25	15	50
6歳児	11	0	17	28
合計	39	68	32	139

表5. 母親の勤務形態と所属のクロス表

	所属			合計
	保育園	幼保園	幼稚園	
専業主婦	2	18	27	47
パートタイム	19	24	5	48
フルタイム	17	21	0	38
未記入	1	5	0	6
合計	39	68	32	139

3-3. 平日の子どもと母親のテレビ視聴状況

子どもの平日一日あたりのテレビ平均視聴時間は1.74 ± 1.09時間、子どものテレビ平均接触時間は

3.53 ± 1.92時間、母親のテレビ視聴時間は2.17 ± 1.82時間であった。

年齢によるテレビ視聴状況の差異

年齢毎に、子どものテレビ視聴時間、テレビ視聴時間、親のテレビ視聴時間を示した（**図 2**）。この図を見ると、子どもの視聴時間、接触時間、親の視聴時間のすべてにおいて、年齢が高くなるにつれて視聴時間や接触時間が増えているように見えるが、分散分析の結果、有意差があったのは子どものテレビ視聴時間だけであった（F（5,133）=4.50, p<.05; Tukey 法による多重比較の結果、6 歳児は 2 歳児および 3 歳児よりも視聴時間が長かった）。

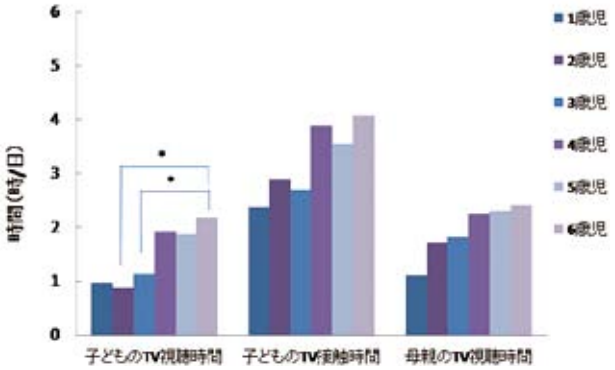

図 2. 年齢別の TV 視聴時間・TV 接触時間・親の TV 視聴時間の平均値

性別によるテレビ視聴状況の差異

男児と女児で視聴状況に差があるかどうかを検討した（**図 3**）。その結果、子どものテレビ視聴状況、子どものテレビ視聴時間、親のテレビ視聴時間ともに男児と女児で差はなかった。

母親の勤務形態によるテレビ視聴状況の差異

父親についてはほとんどの家庭でフルタイム勤務であったため、本調査では母親の勤務形態によって視聴状況に差があるかどうかを吟味した（**図 4**）。

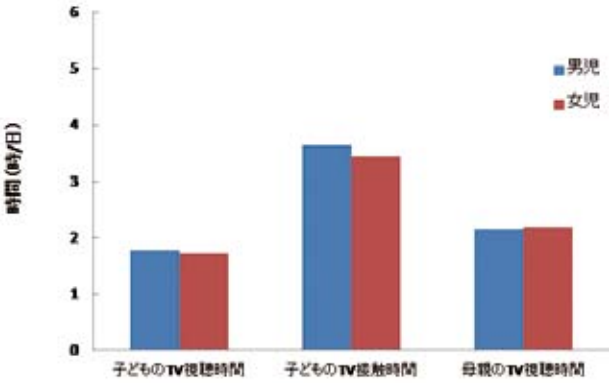

図 3. 性別毎の TV 視聴時間・TV 接触時間・親の TV 視聴時間の平均値

子どものテレビ視聴時間、児のテレビ接触時間、親のテレビ視聴時間ともに、勤務時間が多くなるにつれて減っていることが分かる。分散分析の結果、勤務形態によって子どものテレビ視聴時間、子どものテレビ接触時間、母親のテレビ視聴時間で差が見られた（F（2,132）=11.80, p<.05; F（2,132）=19.05, p<.05; F（2,132）=3.43, p<.05）。Tukey 法による多重比較の結果、テレビ視聴時間は、専業主婦の方がパートタイムやフルタイムよりも高いことが示された。また、テレビ接触時間は、専業主婦の方がパートタイムやフルタイムよりも高いこと、パートタイムの方がフルタイムよりも高いことが分かった。親の視聴時間については、フルタイムよりも専業主婦の方が高いことが示された。

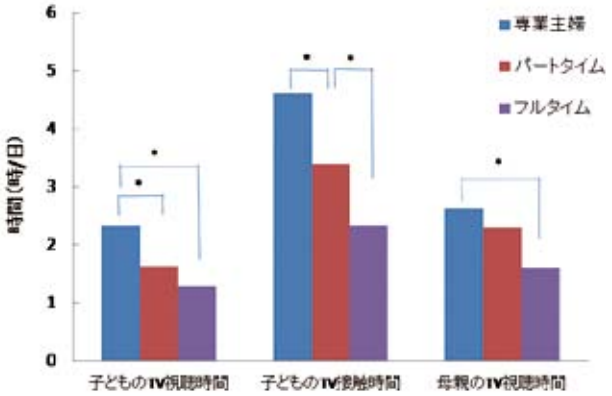

図 4. 母親の勤務形態別の TV 視聴時間・TV 接触時間・親の TV 視聴時間の平均値

3-4. 変数間の関係の検討

概念モデルに従って変数間の関係を吟味するため、パス図を構成し、共分散構造分析を用いてその適合性を評価した。手順は、①基本モデルの作成、②探索的な共分散構造分析の実施、③テレビ視聴時間と生活変数の間の因果性の評価、であった。

①基本モデルの作成

適切なモデルを探索する土台とするため、以下の方針を立てて、網羅的なパスを描いたパス図を構築した。

- 母親のテレビ態度・育児態度を示す 5 変数（母親のテレビ視聴時間、TV 肯定度、TV 等制度、TV 外活動、教育意欲）を外生変数とし、相互に相関関係を仮定する。
- 外生変数から直接影響を受けるものとして、子どもの生活特徴である 3 変数（TV 視聴時間、自律度、発達度）をおく。

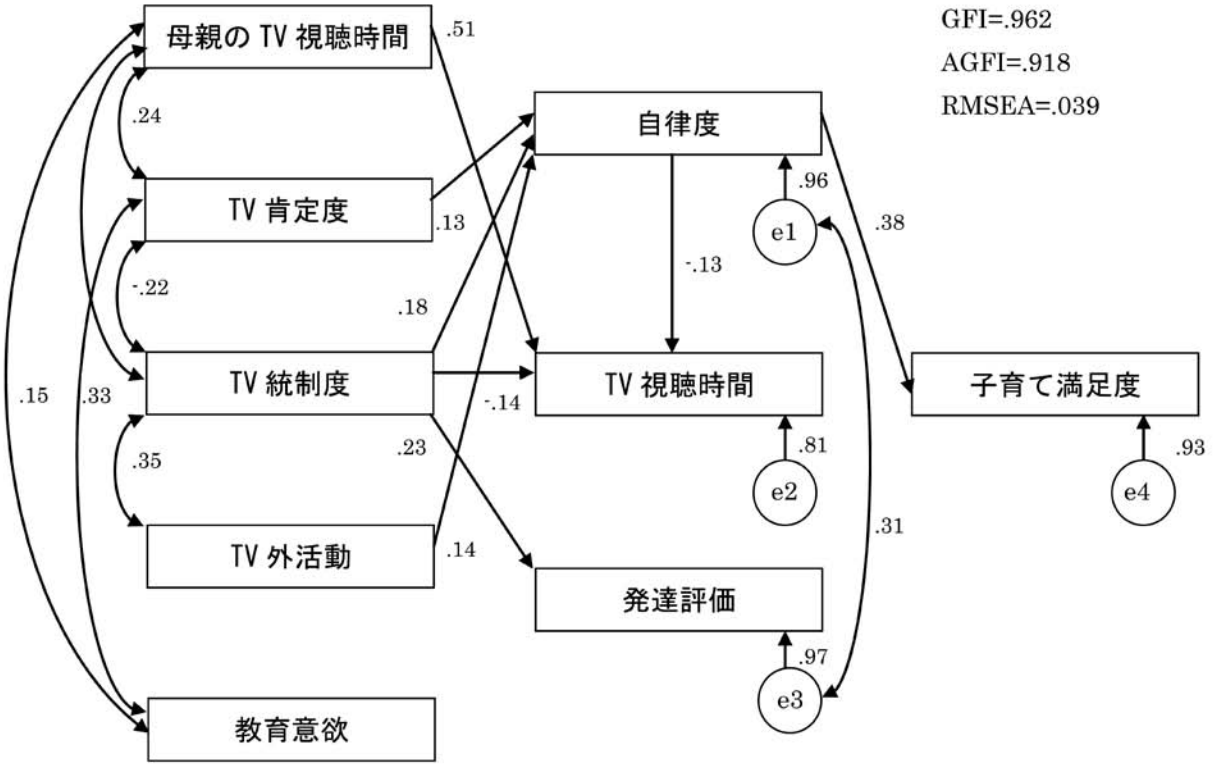

図 5. 本研究で得られた最適モデル
数値は標準化パス係数の推定値を示す

・最終的な子育ての質の指標として、親の子育て満足度を用いる。
・外生変数から生活特徴（5 × 3=15）、生活特徴から子育て満足度(3)には全ての因果性を仮定する。
・因果の方向性を吟味する「TV 視聴時間－自律度」「TV 視聴時間－発達度」には両方向の因果パスを仮定する。
・3 つの生活特徴のうち、因果性を吟味しない「発達度」と「自律度」の間には相関関係を仮定する。

②探索的な共分散構造分析の実施

基本モデルに対して、探索的な共分散構造分析をおこない、データに合致するモデルを検討した。その際、計算の効率上の理由から、相関が 5%水準で有意であったパスについては、必ずパスが描かれるように固定しておこなった。最適モデルの選択の基準としては BCC0 を用いた。その結果得られた最適なパス図が**図 5** である（BCC=77.052, GFI=.962, AGFI=.918, RMSEA=.039）。GFI および AGFI が .90 を超えており、RMSEA が .05 を切っているので、非常に当てはまりのよいモデルといえる。

③テレビ視聴時間と生活変数の間の因果性の評価

②で描かれたモデルにおいて、「TV 視聴時間←自律度」のパスが描かれたが、確認のために「テレビ視聴時間－自律度」の因果の方向性について細かく吟味した。

まず因果の方向を逆方向にしたモデルとの間で適合度の比較をおこなったところ、GFI=.960、AGFI=.915、RMSEA=.044 であった。これらの値は十分な適合度を示すものであるが、元のモデルよりは適合度は低かった。

さらに、両方向の因果性を同時に吟味するため、双方向の因果パス（TV 視聴時間→自律度、自律度→ TV 視聴時間）を描いたモデルを分析にかけたところ、標準化パス係数は TV 視聴時間→自律度で .01、自律度→ TV 視聴時間で－ .14 となり、自律度から TV 視聴時間への影響の方がはるかに大きいという結果になった。

変数間の関係

＜外生変数から子どもの生活特性への影響の特徴＞

母親のテレビ視聴時間は、子どものテレビ視聴時間に正の影響を与えていた。また、自律度に正の影響を与えていたのは、TV 肯定度、TV 統制度および TV 外活動であった。発達評価は TV 統制度によって正の影響を受けていた。TV 統制度は、子どもの生活特性すべて（自律度、TV 視聴時間、発達評価）に対して関係があり、TV 視聴時間には負の影響を、

自律度と発達評価へは正の影響を及ぼしていた。

＜ TV 視聴時間と他の生活特性との関係＞

自律度から TV 視聴時間への負の影響が見られた。つまり、自律度が高いほど TV 視聴時間が短くなるという因果性が示唆された。TV 視聴時間と発達評価の間には関連がなかった。

<子どもの生活特性から子育て満足度への影響の特徴>

子育て満足度には、自律度からのみに正の影響があった。

4. 考察

本研究では、子どものテレビ視聴に関わる様々な変数間における因果の方向性の吟味を質問紙法によって試みた。ここではまず、子どもたちのテレビ視聴状況について考察してから、得られた最適モデルを元にして、子どもの生活特性に影響を与える母親の態度要因、テレビ視聴時間と自律度の関係、子育て満足度に影響を与える要因の順に検討する。そして、これらの知見を元に、テレビ視聴と子どもの発達について考えていく。

子どものテレビ視聴状況

母親の勤務形態（専業主婦、パートタイム、フルタイム）別にテレビ視聴状況を見てみると、母親の勤務時間が長くなると親も子もテレビ視聴時間が短くなっていた。当然ながら仕事を持っていないと親子ともに在宅時間が長くなる。そのため、テレビを視聴する時間も増えたと考えられる。

子どもたちの平均視聴時間を年齢別に見てみると、2、3 歳児で低く（1 日あたり約 1 時間）、6 歳児で高かった（1 日あたり約 2 時間）。中井ら（2010）の報告[2]によると、就学前児の平均テレビ視聴時間（専念視聴とながら視聴を合わせた時間）は、1 歳台が最も長く（1 時間 44 分）、成長に伴って減っていくという（5 歳台では 1 時間 36 分）。今回、年長児の方がテレビ視聴時間が長かったのはなぜだろうか。考えられる理由としてサンプル抽出をした地域の違いがあるが、それよりもより大きな要因として考えられるのが、本研究のサンプル抽出に偏りがあったことである。今回は受け入れ年齢や定員数の異なる 3 園に通う子どもたちの母親を対象として研究を行ったが、年齢ごとの人数や母親の勤務状況の割合を考えると、地域全体を代表しているとはいいがたい。特に、今回は通園している子どもたちを対象としたため、0 ～ 3 歳の年齢についてはほとんどが母親が仕事をもっている家庭のデータであった。先に述べたように、母親の勤務時間が長くなると、テレビ視聴時間が短くなる。そのため、今回の調査では低年齢児で視聴時間が少ないという結果につながったのではないか。今後は、年齢や母親が仕事をもっているかどうかなどに偏りがないよう統制したうえで、先行研究の結果と差異があるのかどうかを検討する必要がある。

子どもの生活特性（TV 視聴時間・自律度・発達評価）に影響を与える母親の態度要因

子どものテレビ視聴時間に影響を与えたのは、母親の TV 視聴時間と TV 統制度であった。母親のテレビ視聴時間が長いほど、子どもはテレビを長く見ていた。これは、多くの先行研究（たとえば、中井ら ,2010[2]；加納ら , 2009[9] など）によって報告されている結果と一致する。親がテレビを見ていれば、当然子どもも視聴する可能性が高くなると考えられる。親の生活習慣が子どもの生活習慣に大きく関係するといえるだろう。

自律度には、TV 肯定度、TV 統制度、TV 外活動が正の影響を与えていた。絵本読みや外遊びなどのテレビ以外の活動や、テレビ視聴をコントロールすることが、子どもの生活習慣の形成を促すことにつながると考えられる。なぜテレビ肯定度が自律度を高めることにつながるのかについてはこの研究だけからははっきりしない。この先、さらに検討が必要である。

TV 視聴時間と発達評価の関係

今回の研究では、TV 視聴時間と発達評価の間に関連性は見られなかった。いくつかの研究では、テレビ視聴時間が長いと発達（語彙発達や精神発達指標など）にネガティブな影響が見られることを指摘している（たとえば斎藤 , 2008[8]）が、本研究の結果はそれを支持しなかった。今回は、子ども一人一人に発達検査や語彙検査をしたのではなく、母親による発達評価であったという点が、先行研究との食い違いを生じさせたのかもしれない。今後検討する必要があるだろう。

TV 視聴時間と自律度の関係

TV 視聴時間と自律度の関係に負の相関が見出された。この結果は、テレビ視聴時間の長短と幼児の生活習慣には負の相関があることを指摘する多くの研究（服部ら , 2004[7]；栗谷・吉田 , 2008[11] など）と一致する。しかし、共分散構造分析の結果、先行研究が指摘しているようなテレビ視聴時間を原因とし生活習慣の形成を結果とするような因果性よりはむしろ、規則正しい生活習慣効果の結果としてテレビ視聴時間が短くなるという因果性を支持する結果が得られた。相関研究を用いた研究では、テレビの

視聴時間と発達に負の相関が見られると、テレビを長く見ていたために発達に悪い影響が生じたと結論づけられることが少なくない。たとえば、先にあげた、幼児を対象にしてテレビ視聴時間と生活習慣の形成の間に負の相関を見出した服部ら（2004）の研究7）では、節度のない長時間のテレビ視聴は、子どもの興味優先の生活スタイルに陥りやすく、親のしつけが細かいところまで行き届かなくなる可能性があると指摘している。しかし、今回の研究では、テレビ視聴時間が長いから生活習慣の形成に悪影響が生じるのではなくて、不規則な生活をしているからテレビ視聴時間が長くなる可能性が示された。

TV統制度が自律度、TV視聴時間、発達評価に与える影響

TV統制度は、すべての子どもの生活変数（自律度、TV視聴時間、発達評価）に影響を与えていた。親が子どものテレビ視聴時間を制限したり、内容を吟味するなどして子どものテレビ視聴をコントロールすることは、子どものテレビ視聴時間を短くすることに関連していることは先行研究によっても指摘されている（中井ら，2010）[2]。親が子どものテレビ視聴を制限するよう働きかければ、当然子どものテレビ視聴時間は減少すると考えられる。しかし、本研究では、テレビ視聴時間以外の子どもの変数（自律度、発達評価）にも正の関係があった。なぜ、TV統制度がこれほど大きな影響力をもつのであろうか。考えられる大きな理由の一つは、TV統制度はテレビに関する母親の態度を示すだけでなく、育児態度全般に対する母親の態度を表しているのではないかということである。子どものテレビ視聴時間を制限してテレビ視聴以外の活動時間を確保しようとしたり、子どもの見ている番組が子どもにとって悪影響を及ぼしそうなものであるかどうかを気にかける母親は、おそらくテレビ以外の子どもの生活全般にわたり、子どもの様子を見て適宜行き過ぎないように配慮することが多いのではないだろうか。つまり、テレビを統制することが生活全般に影響しているというよりは、テレビの統制度合いが母親の育児行動全般に対する姿勢を強く反映する指標となっていることを示唆すると考えられる。菅原ら（2007）[12]は、3歳児を対象として、子どもの社会性とテレビ視聴の関連を検討したが、その結果、親のテレビ共有機能（たとえば子どもと一緒に見るなど）は協調性・共感性および能動性・自己主張性得点と弱い関連が見られたこと、親のテレビ統制機能（たとえば見てよい番組が決まっているなど）の高さも協調性・共感性と関連が見られたことが明らかにした。菅原らの研究では、母親のフィルタリング機能（テレビ視聴の共有・統制）が多いほど、子どもの「協調性・共感性」が高いことを示す結果であるが、こうしたフィルタリング機能が母親の育児態度を示す指標となっている可能性もある。

子育て満足度に影響を与える要因

子育て満足度に対しては、自律度からの正の影響が見られたが、テレビ視聴時間そのものは親の満足度とは関連を示さなかった。子どもの自律度が高い、つまり生活習慣が形成されているほど、親は子育てに満足感を感じる可能性が指摘された。

テレビ視聴と子どもの発達

従来、テレビ視聴が子育てや子どもの発達において大きな意味をもつという立場から、様々な研究がなされてきた。その多くは相関研究であったが、そこから得られた結果は、テレビの長時間視聴が生活や発達に悪影響を及ぼすことを示唆する目的で用いられてきたことが多かった。しかし、今回の結果からは、テレビの視聴時間はむしろ他の生活特徴を反映する指標の一つと解釈する方が妥当であることが示唆された。極端に長いテレビ視聴時間は、その子どもの生活全般における何らかの問題の結果引き起こされたものなのかもしれない。先に、乳幼児期のテレビ視聴と後の注意の問題の関連を示したChristakis et al.（2004）の研究を紹介したが、この研究データに収入や母親の学業成績などの要因を加えて再分析をしたところ、テレビ視聴時間の効果が消えてしまったことが示されている（Foster & Watkins, 2010[14]）。子どもの発達を後押しすることを考えるのであれば、極端な長時間視聴が生じている場合、視聴時間を短くすることばかりにとらわれるのではなく、長時間視聴を可能にしてしまう生活環境全般を根本から見直していくことが必要であろう。

また、今回は調査の対象としなかったが、視聴時間だけでなく、コンテンツによる影響も検討すべき課題である。暴力的な映像と子どもの攻撃性との関連を指摘する研究[13]などネガティブな知見が多く見られる一方で、コンテンツによっては言語発達を促すという報告もある。たとえば、Rice et al.（1990）[15]は、就学前児におけるセサミストリートの視聴と語彙発達を縦断的に調べた結果、セサミストリートの視聴は就学前児の語彙発達を促すことを示している。また、低所得層の2～5歳と4～7歳の2グループを対象としたWright et al.（2001）の研究[16]では、3年間テレビ視聴日誌をつけてもらい、さらに年一回、読み・算数・受容言語・スクールレディネスのテストを行った。

その結果、2～3歳時の幼児向け教育番組の視聴が後の好成績を予測することが示された。一方、一般番組の頻繁に見る子どもはそうでない子どもよりも成績が劣ることも明らかにされ、テレビ番組の視聴がアカデミックスキルを促すかどうかは番組内容によることも示唆されている。

好むと好まざるとにかかわらず、もはや子どもたちにとってテレビは生活環境の一部となっている。子どもがどのような番組をどのくらいの時間視聴しているのかを気にかけ、他の活動とのバランスを取りながら上手にテレビとつきあっていくことが重要であると考えられる。

5. 謝辞

本研究にご協力くださいました園の教職員の皆様、保護者の皆様に深く感謝いたします。

本研究は、平成22年度帝京科学大学教育研究特別推進費（採択番号10，研究課題名：教育者育成カリキュラム構築のための基礎的研究－生命（いのち）・環境・地域をテーマとして－，研究代表者：濱野佐代子）の助成を受けておこなわれました。

6. 引用文献

1. NHK放送文化研究所：“子どもに良い放送”プロジェクト中間総括報告0-5歳　http://www.nhk.or.jp/bunken/research/bangumi/kodomo/kekka.html
2. 中井俊朗・西村規子・菅原ますみ：乳幼児期のテレビ接触を規定する要因～“子どもに良い放送”プロジェクト・中間総括報告書から～ *NHK放送文化研究所年報*：295-325，2010.
3. 菅原ますみ・酒井厚・服部弘・一色伸夫　乳児期の発達と映像メディア接触：影響性に関する因果推定の可能性を探って　*ベビーサイエンス*，5：46-53, 2005.
4. Christakis, D. A. & Meltzoff, A. N.：Associations between media viewing and language development in children under age 2 years. *The Journal of Pediatrics.,* 151（4）：364-368, 2007.
5. Christakis, D. A., Zimmerman, F. J., DiGiuseppe, D. L., & McCarty, C. A.：Early television exposure and subsequent attentional problems in children. *Pediatrics.,* 113（4）：708-713, 2004.
6. Zimmermann, F. J. & Christakisu, D. A.：Children's television viewing and cognitive outcomes. *Archives of Pediatrics & Adolescent Medicine.,* 159：619-625, 2005.
7. 服部伸一・足立正・嶋崎博嗣・三宅孝昭：テレビ視聴時間の長短が幼児の生活習慣に及ぼす影響．*小児保健研究*，63（5）：516 － 523, 2004.
8. 齋藤好子：1歳6か月児の精神発達指標、生活およびテレビ・ビデオ視聴時間の関係．*小児保健研究*，67（1）：109-115, 2008.
9. 加納亜紀・高橋香代・片岡直樹・清野佳紀：幼児期のテレビ・ビデオ視聴と養育環境の関連．*小児保健研究*，68（5）：549-558, 2009.
10. 服部伸一・足立正：幼児の就寝時刻と両親の帰宅時刻並びに降園後のテレビ・ビデオ視聴時間との関連性．*小児保健研究*，65（3）：507-512, 2006.
11. 栗谷とし子・吉田由美：幼児のテレビ・ビデオ視聴時間、ゲーム時間と生活実態との関連．*小児保健研究*，67（1）：72-80：72-80, 2008.
12. 菅原ますみ・向田久美子・酒井厚・坂元章・一色伸夫：子どもの社会性とメディア接触との関連．*“子どもに良い放送”プロジェクト　フォローアップ調査中間報告　第4回調査報告書*，ＮＨＫ放送文化研究所：60-65，2007.
13. Huesmann, L. R., Moise-Titus, J., Podolski, C.L. & Eron. L.D.：Longitudinal relations between children's exposure to TV violence and their aggressive and violent behavior in young adulthood：1977-1992. *Developmental Psychology.,* 35（4）：201-221, 2009.
14. Foster, E.M. & Watkins, S.：The value of analysis: TV viewing and attention ploblems. *Child Development.*, 81：368-375, 2010.
15. Rice, M. L., Houston, A. C., Truglio, R. & Wright, J. Words from “Sesame Street”：Learning vocabulary while viewing. *Developmental Psychology.,* 26（3）：421-428, 1990.
16. Wright, J. C., Huston, A. C., Murphy, K. C., St. Peters, M., Pinon, M., Scantlin, R. & Kotler, J.：The Relations of Early Television Viewing to School Readiness and Vocabulary of Children from Low-Income Families :The Early Window Project. *Child Development.*, 72（5）：1347-1366, 2001.